

忘れられた怒り

藤井颯太郎

青年は、もう三日ともに眠っていない。隣へ越してきた若い夫婦が毎晩大騒ぎをするせいで。特に今夜は一睡もできないほどひどく、振動で揺れた室内灯のシェードから青年の鼻先にホコリが落ちてきたのをみて、直接警告することにした。俺は、俺の安眠を奪ったやつを許さない。

怒り任せに呼び鈴を鳴らすと、ドアの隙間から女が顔を出した。勢い込んで怒鳴りつけるつもりだったが、女の種類は飛び交う怒声(こゝろ)と悲鳴(なげき)だったのだ。

「借金のことで夫と喧嘩(けんか)してしまって」と女は事情を話してくれた。女顔に飾られた写真には、優しい顔つきの男と笑顔の女が写っている。そんな二人の平穏な生活を借金取りが壊したのだ。女から借金取りの家を聞き出す。体温が上がっていく。怒鳴りつけるべき真の敵は、借金取りだったのだ。

「僕が話をつけてきます」

だが、借金取りの家の呼び鈴を鳴らすと、想像した借金取りとはほど違い、気弱そうな男が出てきた。男は父親の散財に悩まされ、友達に貸した金の催促をしたのだと事情を話してくれた。青年は今起きていること全てを理解した。そうか、真の敵はこの男の父親だったのだ。

「僕が話をつけてきます」

それから数時間が経った。青年はあの男の父親を訪ねた後から今まで、何件もの家を巡るはめになっていた。父親の浪費の原因となった、キャバ嬢は、失恋を酒や散財で忘れるため荒稼ぎしていた。キャバ嬢をフット。作曲家は、銀

行に融資を止められ、恋を捨て仕事に打ち込んでいた。作曲家の融資を打ち切った。銀行員は、息子の病の治療薬を手に入れるため、銀行から資金を横領する計画を立て、担当していた融資の顧客を減らし計画準備の時間を確保していた――

青年が説得を試みると、皆一律に顔を相対しはじめ、そのたび真の敵が明らかになる。青年は汗を流し自転車を漕ぎ、次々と呼び鈴を鳴らしつづけた。

「あなたが銀行員の息子さんに薬を売らないことが全ての元凶なんです」

深夜二時頃、青年は駅前の薬局の店主を叩き起こし、呼吸乱れたまま全ての経緯を捲(ま)き立てた。寝起きの店主は気圧されながらも反論した。

「ここでお話が食い違っているかはわかりませんが、その治療薬は私が売らないのではなく、この世にまだないんです」

「この世にない？」

「薬は、まだ発明されていないんです」

青年は黙り込んだ。まだ発明されていない薬が原因ならばどうすることもできない。俺はこれから、どの家の呼び鈴を鳴らせばいいんだろ。

呆然とする青年をみて、気の毒に思った店主は「私の説明不足で銀行員の方(かた)に誤解を手えたかもしれない。本当に申し訳ない」と頭を下げた。店主の謝罪を聞いた途端、青年の身体に異変が起きた。これまで燃え上がった怒りの炎が、みるみる小さくなり、胸に淡い風が吹き抜けるのを感じた。そうだ、やっと全てが解決したのだ。

青年は自宅へ戻ると、気分良くベッドへ潜り込み達成感を抱きしめた。明日になれば銀行員の誤解は解ける。そうすればこの街に住むみんなの問題が全て、ドミノを倒すように解決していくだろう。そう思うと、これまでの苦勞が報われ、俺は重くなっていった。隣の部屋から聞こえてくる女の悲鳴も心なしか、いつもより心地よく感じる。今夜はぐっすりと眠れそうだ。

